

---

# 異人なる渡人

ノービット

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異人なる渡人

### 【Nコード】

N3621K

### 【作者名】

ノービット

### 【あらすじ】

転生ものです。神に気に入られたある一族の人が転生を繰り返しながら異世界にも渡ると言うお話の予定です。自由気まま人です。最強かもしれませんが。初心者投稿なので寛大な心でお願いします。

## 第1話

### 第1話

年の瀬が迫る中。郊外の閑静な住宅地にある日本家屋の立派な一軒家。家と呼ぶよりもお屋敷と呼ぶにふさわしい家の中で、もっとも奥まった部屋の中、一人の人が生涯を終えようとしていた。人払いがされているのか、部屋の中には一人。布団から半身を起して、静かに部屋専用の庭に降る雪景色を見ていた。

（この度の生もなかなか楽しかったですねえ。やはり人間と云うのはとても興味い。『発つ鳥跡を濁さず』です。後の指示も出していますし、大丈夫ですよ。問題が有ってもよい後継達がいいますから大丈夫でしょう。嗚呼、もうそろそろですね。苦しくなってきました。ふふ。ちゃんと言いつけを守って誰も来ませんし。居間の方で集まってる気配がしますが問題なし。最後に雪景色も見れましたしね。）

その時、庭に降り落ちていた雪が地面に落ちる事無く空中に停止し、風に揺られていた木の枝が動きを止め世界が時を止めた。世界が時を止めたというのに、人は慌てる事無く微笑んでいた。

「お迎え御苦労様です。死神さん。」

突然空中に人が現れた。その人物は黒く長いフードローブを被り大きな鎌を持った、いかにも死神ですと言わんばかりも風体であった。あやしき満点のその人物に対して雪景色を眺めていた人は、驚く事無く微笑みながら挨拶した。

「何だ、驚かないのか。つまらないな。たまには驚いた振り位してくれよ。」

死神風の人はずまらないと言いながらも声は笑っていた。

「そうは言っても何回も迎えに来ていただいてますからねえ。それにしても久しぶりの正装ですね。一瞬、誰か解りませんでしたよ。その格好は嫌いだったんじゃないですか？最近はずっと流行の服で来ていたのに。」

死神風の人、いや、まさしく死神に友人に対するように気軽に話している。まるで死神によく会っていたように。

「上の連中にはれたんだ。あいつらは流行を解ってくれないんだよね。まったく、これだから爺どもは嫌だねえ。それに今回は、上司が話があるとかで上の連中がいる所まで行かないといけないんで、この服じゃないと後で煩いんだよ。大事な大事な死神の伝統衣装だからな。もう準備はいいか？」

嫌そうにローブを掴みながら死神は言い。鎌を肩に担ぎ、人に向かって手を差しのべた。

「ええ。大丈夫です。じゃあ、行きましょうか。」

人は、差延べられた手を取った。死神の手だというのに。何ら臆することなく。死神が手を引くと、人の体が二重にブレて、片方は死神に手をひかれて立ち上がり、片方は布団に倒れこんだ。倒れこんだ自分の体を見ても慌てる事無く、肉体に別れを告げるように最後に一礼をしてから死神に向かい合って

「じゃあ行きましようか。」

と、微笑みながら言った。

この日、古くからの旧家である藤巽家の36代当主、藤巽 奏が当主本人の希望により誰にも看取られる事なく息を引き取った。奏は没落しかけていた藤巽家を立て直し、分家からも慕われていた優れた人格者だった。だが家族からは、ちよつと変わったところがある変人と認識されていた。稀にくだらな悪戯をしていたからである。だがそんな所が近寄りがたくなくいい、と家族以外には容認されていた。家族は、偶に腹は立つが激怒まではいかなない絶妙なさじ加減の悪戯具合と家族思いな所を、変人と言いながらも愛していた。だから最後の希望である看取られずに一人で旅立つ事にも同意し、気配を伺い気配が消えた途端部屋に飛び込み皆で号泣した。まさか、死神と仲良く話しながら消えたとは思わずに。知ったらここまで泣きはしないだろう。

## 第2話

### 第2話

2人の人物が何も無い真っ白な空間を歩いている。片方は死神装束の人物。もう一人は渋い濃緑の着物を着て、まだまだ壮年で通じる男性。男性は、先ほどまで日本家屋で雪景色を見ていた人物である。先ほど死神に手を引かれて亡くなったはずの藤巽 奏。死んだ事など気にしていないように呑気に死神と話しながら歩いている。

「ここを通るのも久しぶりです。相変わらず何にもないですね。そういえばダリウス。フードは取らないんですか？その下はもちろんガイコツなんでしょ？」

奏は、楽しみに死神装束に人物に話しかけた。ダリウスが死神の格好を嫌っているのは勿論承知で。特に自分の骸骨姿を見られるのを嫌がるさまを見てやろう、と内心大笑いしながら話しかけた。

「お前楽しんでるだろ！そんな事はどうでも良いんだよ。それより今回の人生はどうだったんだ？お前にしては大人しく過ごしていたじゃ無いか。」

ダリウスは、骸骨姿から話をそらすように、奏の人生の話を書ききたそうにした。ちょっと声が高くなったのはご愛敬である。そんなダリウスの声の変化に気がつかない振りをしながら、奏はまあいいかと思い、話した。

「いやあ、何回も転生しながらいろんな人生を過ごすうちに、普通の一般的な人生を送って見たくなっただけですよ。中々楽しかったで

すよ。いろんな能力に制限をかけて過ごすのも。擬態が上手くなり  
ましたよ。学生の頃はちよつとグレテみたり。家出してみたりとか。  
結婚するまでハーレムフラグ立てまくったりとか、娘の交際の邪魔  
したり。息子の恋人にちよつとフラグ立てたりとか。一般的な事を  
して過ごしてましたよ。ああ、あと会社の立て直しとかもしました  
ね。」

「それが一般的なのか?!お前の一般的は間違ってると思うが…」

ダリウスはこいつの家族は可哀想だったな。とちよつと青ざめなが  
ら、俺が迎えに行く担当だったら優しくしてやるう思った。こいつ  
の事だから内心ノリノリでやったんだらうと予想していた。そして  
その予想は当たっていた。家族のうち2人胃潰瘍で入院しかけたこ  
とが有るのだった。

「そうですね?ドラマなんかを参考にしたんですが。みんな楽しそ  
うにしてみましたよ。そういうえば、娘が何か波乱万丈な人生ねって言  
ってましたね。何回か会社が潰れそうになっただんですよ。でもそれ  
で家族の絆が深まってよかったとも言っていましたから、テーマは  
『家族愛』って感じですね。世界的には目立ちませんでしたから大  
人しい方でしたよ。やっぱり危機が有ると絆が深まり、人は成長し  
ますね。」

奏は楽しそうに家族の話をした。彼にとっては今迄にたくさんの家  
族を持ったが、ども家族もいい思いがある。奏は、絶対記憶とい  
う能力を持っており頭の中に図書館の様に情報を整理し忘れるとい  
う事が無いのである。普段使わない記憶は、圧縮して外部に保存し  
ていたりもする。余談だが、会社の危機は、奏が裏でこっそりと起  
こした物である。バレていたら袋叩きである。

「まあ、楽しめたんなら良かったが。一族の方には接触し無かったんだな。良かったのか？」

「問題無いですよ。私はただの相談役ですから。いてもいなくても問題ありません。」

「よく言うよ。お前はラーバレスティヤ一族のラーバレスティヤだろうが。一族の名前で呼ばれるって事実上のトップだろ。いいの？」

「大丈夫ですよ。名前は長く生きていますから色々あるんですよ。中々面白い人物が育って居るようですよ、それに余り一族のところに行くとも面倒事に巻き込まれるじゃないですか。基本、うちの一族は変人ばかり出るからね。自由人ばかりですから。それに本当の緊急の時に使う、緊急連絡獣を置いていきますら。」

奏は、いやラーバレスティヤは飄飄と答えた。ダリウスはラーバレスティヤとは長い付き合いだが、全てを知っている訳ではない。ただ、神に気に入られて記憶を保持したまま転生を繰り返していることを知っている。ある意味で有名な一族のラーバレスティヤを、死神の噂で存在を知り見に行ってみたらあっさり見つかった、色々話すうちに仲良くなった。友人として面白いやつだと思っている。予想外のことを起すから楽しいのだ。これからもこの関係が続けばいいなと思っている。

「緊急連絡獣ってなんだ？」

「ああ。生きている時は良いんですが、死んでいる時は連絡がつきにくいので、丹月って名前の犬を一族の本拠地に飼っているんですよ。便利な子ですよ界渡が出来るので他界にも行けますし。賢いイ



イ子なんです。」

「それって神獣だろ！！飼ってるのかよ。」

「そうともいいませんねえ。ちゃんと飼い犬登録はしていますよ。たまにドックショーに出たりして優勝したとか嬉しそうに報告してくれるんですよ。可愛いですよ。うちの一族のマスコットです。」

ダリウスは頭が痛い、頭を押さえている。当り前である。普通神獣とは、崇められ大事にされてめったに人前には出ないものであるのに、ドックショーとは。神獣がペット？優勝を喜ぶ？ずいぶん俗物的な神獣である。ハアー、溜息が出てくる。まあ…あの一族だしな。無理やり己を納得させた。予想外の行動は楽しいが、偶に自身の体調が気になるダリウスであった。

### 第3話

### 第3話

「お前をこの世界から……追放する！」

「はぁー？」

バキツツ？ と、音と共に老人が吹っ飛んで行った。嗚呼、私とした事が。つい不愉快：いえ驚いてしまつて御老体を殴つてしまいました。言葉より先に手が出るとは、まだまだ私も若いですね。フーフ。それにしてもイイ感じに吹っ飛びましたね。さすが私です。うんうん。と奏が頷いていると。

「いきなり何をする！ちよつとふざけただけじゃないか？何も殴らなくても良いじゃろう？おーイテテテ……。まったく、老人に暴力を振いおつて。」

腰を擦りながら、ふっ飛ばされた老人が戻ってきた。殴られた顔よりも打ちつけた腰を痛がっている。面の皮は厚いようだ。

「イキナリおかしな事を言い出すからですよ。追放つてなんですか？説明してください。それに殴られるくらい大したダメージではないでしょう？仮にも神なんですから。老人と言いますが私も老人ですよ。」

「痛いものは痛いんじゃない？・・・フーー　まあよい。追放というのも、あながち間違つてもいないんじゃないよ。ルクレエストが管理して

いる世界の1つが、変化が欲しいから変わった魂を欲ししとるんじやよ。だから行ってくれんかのう？お前さんも気分が変わってよいじゃろう。」

「追放といいますが、引越すですね。いいでしょう。何か変な制約などは付きませんか？私は自分が遣りたくない事はしませんよ。己の心に忠実に生きるのをもつとりにしていますから。」

「制約などは付かんよ。お主の事はよく分かってるからのう。好きに生きるがよい。ただ生きるだけでもお主は周りに影響を与えるからな。（下手に制約などかけて暴れられたらかなわんからな。）」

「んん？何だか不愉快な波動を感じましたね。まあいいでしょう。偶には変化が有るのもいいです。次はどんな人生を送りますかねえ。まあ生まれてから考えましようか。どんな環境に生まれるか分かりませんし。どの様な環境でもいろいろな発見があつて楽しいですから、楽しみますか。ラーバレスティヤの人生は己の心の向くままに、どんな事でも楽しむ心を大事にしている。好奇心旺盛なのだ。」

「すぐ出発ですか？」

「そうじゃな。別れの挨拶はよいのか？」

「ああ。ダリウス居たんですか。心配がないから忘れてましたよ。」

「ひでー。神との会話に口を挟めるはずがないだろ。下つぱ死神がしばらく会えるか分からないから元気だな。お前の事だから長生きすると思っけど早死にするなよ。」

「ええ、ありがとう。面白おかしく楽しく生きますよ。じゃあまた…送って下さい。」

「うむ。では行くぞ。」

神が手をかざすと、ラーバレスティヤの姿が輝きだんだんと体の形が崩れて丸い発光体になった。その発光体に神が触れると、一度強く輝いた後、フツと消えてしまった。

「行ったな。せいぜい楽しんで引っかき回すがよい。問題を起してもワシの責任にはならんからのう。フフフ。」

「神よ……」

ダリウスはこんな上司嫌だなあ。と思いつつあいつの事だから何か問題おこしそうだなあ。まあ、問題起してもルクレスト様の所だからいいかと結論ずけた。似た物主従である。

「それよりダリウス。死神装束似合ってるな。」

と、神はしばらくダリウスをからかった。ダリウスは神の言葉に口を挟む事が出来ずに、ありがとうございます。と答えながら性格の悪いじじいめ〜と内心憤っていた。ちなみに、ダリウスの死神装束嫌いは有名である。

## 第4話

### 第4話

部屋の中には血の臭いが立ち込めている。ベットの上には今まさに子を産み落とさんと一人の女が活きんでいた。ベットの周りには医者らしき人物と、侍女らしき人物たちが忙しそうに立ち動いている。

「もう少しですよ。メリアナ様。頑張ってくださいまし。メリアナ様。」

侍女は、メリアナと呼ばれた人物の手を握りながら励ましている。メリアナは相当苦しいのか、いつも美しく笑みを浮かべている顔を、苦悶に歪めて呻いている。

「うわあああー」

ひととき大きく叫び声を上げ、侍女の手を強く掴む。侍女ベラは、痛みに顔を顰めそうになりながらもメリアナに声を続けた。

「おお！メリアナ様。お生まれになりましたよ。かわいらしい女の子様です。おお、いかん。喉が詰まっておるようだ。逆さまにして背を叩くんじゃ。」

医者は助手にそう指示を出すと、助手は背を叩きだした。

「おぎゃーー。」

赤子の元気な産声が聞こえてきて、一同はほっと無事に出産が終わったことに胸を撫で下ろした。一同が喜びに浸る中でメリアナの目が暗く輝いたのに気がつく者はいなかった。

「おぎゃーー。（痛い。痛いですよ。もう息をしていますから。叩かないで下さいよ。）」

まったく。何回も経験している事ですが、こればかりは慣れませんねえ。嗚呼、早くおろして下さいよ。いつまで人を逆さまにしているつもりですか。私はそんな事をされて喜ぶ趣味は無いんです。早く降ろしなさいったら。やれやれ。今回はどのような生まれなんでしょうか。おっ。あそこに居るのが母ですか。ずいぶんと疲れた顔をしていますねえ。お疲れ様です。生んで頂いてありがとうございます。母よ。中々美人さんですね。これは私も期待できそうです。

「おめでとつございます。抱いてごらんになられますか？」

「まあまあ。なんてかわいらしいんでしょう。メリアナ様にそっくりでございますね。本当におめでとつございます。将来美人になること間違いなしの姫様ですわ。」

今回の生は女性ですか。美人確實つと中々いいですね。それに姫ですか。いい所のお家なんですね。ふむふむ。喰うには困らないと。

「典医長。子供は死産だった事にしていただけませんか。」

産み落としたばかりの我が子に目を向け、決意を込めて静かな声でメリアナは言った。子を抱く手は微かに震えている。

「メリアナ様。何をっ」

「わたくしは我が君にお約束したのです。立派な男児を産んで見せると。それが、それが。姫などだと。わたくしは我が君には申せません。それに典医長。この子の魔力はとても少ない。これではとも王宮では生きてはいけません。」

「メリアナ様。それは・・・」

えーと。何だか死亡フラグですか？せっかく違う世界に来たのに、生存時間10分。とか嫌ですよ。魔力ですね。はい。大丈夫ですよ。ありますから。有りますから殺さないで下さいよ。実は私、魔力なんてものも持っているんですが、普段、特に生まれる時は完璧に抑えているんですよ。なぜかって？もちろん擬態するためですよ。生まれてみないとその世界の基準が分からないからですよ。異端視されるのも嫌ですし変に期待されるのもねえ。とりあえず、医者の方ぐらい出して見ますか。どうですか？魔力ありますよー。

「おお。メリアナ様。姫様から魔力が溢れていますぞ。まだ生まれただけで不安定ですがワシぐらいは有りますから。ワシはこれでも魔力は多い方です。ですから御心配なさらずに。生まれたばかりで此の魔力量なら将来が期待できますよ。」

「そうですね。メリアナ様。これほどの魔力量なら問題ありませんわ。それに、まだ不安定だという事は、性別も変化する事もありま

す。ロミルトン族なら魔力が不安定なうちは性別は安定しませんし。魔力が多いと御自分で性別を決める事が出来ると云います。ご成長されれば性別はお好きに決められますわ。」

「そうですね。典医長、ベラ。ありがとうございます。魔力が無いから女兒のままかと思いましたが、これだけの魔力なら男児に成れますわね。でも今は姫ですから、我が君になんと云えばよいのか。」

「それならワシが御報告してまいりましょう。メリアナ様はゆっくりと休まれてください。」

「ではメリアナ様、私も失礼いたします。姫様は別室で見えておりますから。ごゆつくりとお休みください。」

「お願いしますね、典医長。ベラも姫をお願いします。」

はあ。何とかなりましたね。ああでも魔力量の期待をされてしまいました。まあいいでしょう。徐々に出していきますか。母の為ですしね。この世界では魔力量を押さえて隠したりしないんでしょうか？うゝんまあ、様子を見てみましょうかね。それにしても魔力量が多いと性別が変化する、ですか。ロミルトン族って言うのは、肉体変化術に特化して進化した一族なんでしょうかね。徐々に体を調べますか。知らない物を知るのは良いですね。それにしても眠い。赤子は体力がないですね。お休みなさい。



## 第5話

### 第5話

ベラが子供部屋の中に入ってきた。赤子を抱き上げてメリアナの部屋に連れて行くようだ。昨日の死産発言が有っただけに緊張しているようである。赤子をしっかりと抱き、いつもより心持ゆつくりと歩いていた。

「さあさあ姫様。母君にお顔を見せに参りましょうねえ。メリアナ様は、ああ仰っておりますが、姫君自身を厭われた訳ではありませんよ。メリアナ様は戦で負けてしまった我ら、ムフリシア族の事をお考えなのです。少しでも我ら一族の立場が良くなるようにと男児を望まれたのです。今は陛下のご寵愛が深いですが、先は分かりませんからねえ。陛下も男子を望まれていましたしね。他のご側室様たちもいらつしやいますし、後宮でのお立場も男児をお産みになった方がお強いですから。それに、メリアナ様は魔力が少ないです。御苦労ばかりされていらつしやるんですよ。ああ、愚痴のようになつてしまいましたね。姫はロミルトン族の血も引いていらつしやいますから、性別変化もお出来になると思いますわ。さあ到着しましたよ。メリアナ様。姫様をお連れいたしました。」

うーん。なるほどねえ。母君は大変そうですねえ。それにしても後宮ですか……。怖いですねえ。愛憎渦巻く魔窟じゃないですか。これは男じゃ無くて良かったですよ。変に目を付けられて暗殺とかされたら嫌ですし。あゝ、でも女もなアア。戦で勝つぐらいの国だったら、地盤を固める為にも政略結婚の道具に使われるのもなあ。

まあいざとなったら逃げますか。この世界も見たいですね。

「あつあゝ（母君お疲れ様です。）」

「まあ、機嫌がよさそうね。母ですよ。愛しき子。分かりますか？」

母君の顔色は良いようですね。安心しました。出産は大仕事ですからね。母君。抱っこ中々お上手ですね。抱きなれていないと気持ちが悪いです、イイ感じですよ。それに笑顔が素敵ですよ。

「メリアナ様つたら。まだお分かりになりませんよ。」

ベラは少し呆れながら母子の様子を見ている。メリアナが笑顔で姫を抱いたので安心したようだ。

「ですが、この子の目に知性の光が宿っているような気がするのです。」

「利発そうなお顔をされていますから、もしかしたらお分かりかも知れませんか。」

「ううああゝ（鋭いですねえ。母君。）」

これはちょっと油断禁物ですね。母のカンですか。母親というものには子供の变化に敏感な所がありますからね。それにしても母君。いい臭いがしますねゝ。暖かいですし。落ち着きます。

「この子には苦勞を掛けるかと思うと心が痛いわ。まずはこの後宮で生き抜いて往かなければいけませんよ。強くなりなさい。無邪気に生きられるほど、ここの生活は甘くないですからね。ああでも、

よく考えたら姫で良かったかもしれないね。跡継ぎ候補の男児なら、暗殺されるやもしれませんし。ロミルトンの血がどう出るかわかりませんが、姫にいる内は安心ですから。男児よりは目を付けられないでしょう。」

「そうですね。幼き内の危険は、少ないに越したことは有りませんから。ああ、では早目に魔力制御をお教えしなければ。魔力が少ないと方々は安心するはずです。」

「そうですね。極秘に封石を取り寄せるのも良いかもしれませんが。」

「あうう〜？（魔力押さえた方がいいんですか？）」

これでいいですかね？完璧に抑えるとまずいから、少しだけ残してつと。

「ベラ！見て？魔力を押さえたわ？この子は私の言うことが、分かっているのよ。」

「偶然ではないのですか？」

「うりゃあ〜。偶然ですよ。偶然。」

「ほら、魔力を開放してみて。」

「あう〜（しませんよ。もう押さえておきます。危険は減らしたいですから。）」

「やっぱり偶然だったのかしら？」

「そうですねえ。」

「うう〜（そうですねよ。）」

取り敢えずはこれから先、魔力がある所を見られないように気をつけないと。赤子で不安定だから。で、納得してもらえらるまでは出さないでおきましょう。とりあえずの目標は、人畜無害で可愛い子ですね。女子なら可愛くないと。周りを味方に付けなくてはね〜この世界の魔術と城の中をまず把握しなければ。あと人間関係も調べてみますか。味方は選ばないと。おっと、弱みの把握も外せませぬね。フフフ。楽しみですねえ。取り敢えずは3年ぐらいは寝たきりですし。寝たきりと言うと介護老人のようですが新生児ですからね。意識を飛ばせば問題ないでしょう。体は、その辺の精霊にでも見張っててもらいますか。ああ、精霊の噂話も外せませぬ。誰かが近づいたら体に戻るように術を掛けておけばいいですね。王宮かあ。いろんな陰謀が渦巻いて居るんだらうなあ。楽しみですね〜。

「ではベラ。極秘に封石を手に入れてください。頼みましたよ。」

笑顔を消して真剣な面持ちでメリアナ言った。我が子の安全の為に封石で、まだ赤子で不安定な魔力が出てこないように押さえるつもりだ。真剣ですね〜。愛されてるなあ私。

「はい。承知いたしました。」

ベラは恭しく跪いて返事をした。

「あ〜（頑張れベラ。）」

封石なんて無くても抑えられるんですがねえ。母君の心配はうれし

いですね。まあ来たら大人しく着けますよ。

「それはそうとメリアナ様。姫君のお名前はお決まりに成られましたか？」

「それがまだなのよ。我が君が考えていて下さった名前は男児のものばかりで。今も考えていて下さるそうなのですが。」

メリアナは少し暗い顔をして言った。男児でなかった事をやはりまだ気にしているのだ。王が望んだのは男児だからだ。実際の王は実はどちらでも良かったのだが、メリアナが男児を望んでいると思っていたので、男児がいいと言っただけだった。この件が典医長にバシて叱られ、名前が決まるまで会わせ無いと言われて。今必死に名前を考えている所だったりする。メリアナが子を死産にするといいだすまで追い詰められている、とは思わなかったのである。役立たずな父である。その時赤子本人は、早く名前を下さうい。と思念を送っていたとか。

## 第6話

### 第6話

あ〜。どうしましょう。どうした物でしょうかねえ？いやね？今日名前が決まったんですよ。まあ、それは有りがたい事ですから。こつ、素直に喜んでいたんですよ。ですがねえ〜。そこで問題発生ですよ。はあ〜。ちよつと回想してみますね。どの辺りが問題なのか分かると思うんで。

「お前の名前は、シルディアナ・ロディウス・ラウル・トラミニアだ。」

母君と一緒に子供部屋に入って来たメタボのおっさんが言った。どなたでしょうか？この方は？まあ、名前を教えてくださいありがとうございます。私が喜びを表してあうあう言っていると、

「喜んでいるな。悩んで考えたかいが有った。」

微笑みながら男性が言った。片手はメリアナの腰に手を添えている。

「ええ。本当に良かったですわ。我が君。良き名をありがとうございます。女児ですが喜んでいただけで良かったですわ。」

メリアナも嬉しそうに微笑みながら言った。腰の手は気にしていないようである。メタボオヤジと美女。間違ってもお似合いではない。あれだな。政略結婚カップルですね。ああ、戦に負けたんですね。人質ですか〜。そりゃ〜、嫌がれませんか。

「その事はすまなかつたな。典医長に叱られたよ。妊婦に余計な負担を掛ける事を言うとな。お前との子ならどちらでも良かったんだ。」

済まなそうな顔をして、本当に後悔をしているようである。妊婦に気を使う事も出来ないとは、ダメオヤジ丸出しでいい所は有るのだろうか。ちよつと心配になる。余計なお世話だろうか。

「まあ我が君。」

メリアナは頬を染めて恥ずかしそうに俯いた。うん。母君は美しい。それに比べてメタボは・・・

「そうだ。名前の二つは私が考えたんだが、三つ目のラウルは宰相がつけたんだ。宰相はメリアナの後見人だからな。」

「そうなのですか。後でお礼を申し上げなければ。」

「そうだな。名前を付けさせると五月蠅かったんだよ。私が考えている横で早く決めると急かしていたんだ。」

「つぶぶ。目に浮かぶようですわ。」

お二人さん仲が良いようですね。イチヤイチャして。それは良いんですよ。ちよつと聞いて下さいよ〜

「ああ〜あ〜あ〜（ちよつとイイですか〜？そのメタいやいや男性は、もしかして父君ですか？）」

「あらあら、不思議そうな顔をしていますね。この方が父君ですよ。初めてお顔を見ますから戸惑っているんですね。可愛いわ」

母君。私の言葉、実は分かっているんじゃないですか？母のカンですか？

「メリアナによく似ているな。私に似なくて良かったよ。」

そうですね。その通りですよ。よく分かっているじゃないですかメタボ。せつかくの人生、美人がいいです。

「そんなことはありませんわ。あごのラインが良く似ていますわ。」

「そうか？」

まんざらでは無さそうに男性が笑っている。あごのラインってメタボ、肉に埋もれてますよね。ああ、そんな事はどうでもいいんですよ。あなたが私の父なんですよね？どうしましょうかね。あらあらまあ本当に。どうしましょう。いえね、私これでもラーバレスティヤ一族なんですよ。何が言いたいかと申しますとですね。血縁関係にある人は分かるんですよ。ここまで言えば分かりますよね？はい。ここに父親だつていう人がいます。メタボです。血が繋がっていません。ウツキヤー！は・は・ぎ・みー？ マズイデスヨ。マズイ。え〜と。この男性、後宮に入つてこれる男性。こ・く・お・う・様ですよ。何考えてたんですか母君〜！？ いや、でも、うん。何か事情が有るんですよ。あ〜。私まだ赤子なのに胃が痛くなりそうです。

「あら？疲れたのかしら。何か興奮しているみたいだったから、名前を頂いて嬉しかったのね。」



「ああ。寝かせておいてやろう。」

2人は、子の心親知らず。という感じに仲睦まじく話しながら部屋を出て行った。シルディアナはぐったりして眠りに入った。その顔は靡されているようにも見え乳母が慌てていたそう。

てな事が有ったんです。これってバレタラ死刑ですか？何だか生まれたばかりなのに問題多すぎます。ベラはこの事を知っているんでしょうか。早くこの国の事を知らなければいけませんね。死亡フラグを叩き折らねば！私に不可能は有りません。ふふ。こうなったら張り切っていきましょー

## 第6話（後書き）

ちよつと短くなりました。すみません。この話は行き当たりばった  
り噺です。

## 第7話

### 第7話

色々分かった事をご報告しますね。さて。とりあえずこの国は、トラミア王国という国だそうです。王制で貴族院の議会が国を動かしている国です。国王の権力は余り無くほとんどお飾りです。昔は王が権力を握っていたのだが、色欲にまみれ政治に関心のない愚王が続き、奸臣貴族たちが権力を握って、現在国を動かしているのは宰相だそうです。そう、私の名付け親でもある宰相です。つまり。国王が気に入るようなモノ、貢物を寄こした人物が一番権力を持つという構造になっているようです。腐っても国王ですからね。各役職の任命権は国王にあるのです。いま一番のお気に入りは母君だそうです。地方視察のために行った地で、ムフリシア族の母君に一目惚れ。それを聞きつけた宰相が、ムフリシア族に因縁をつけて争ったそうです。

宰相は母君を手に入れて国王に献上した。そうしたら宰相は国王の覚えが良くなるし後見人ですから、母君を通して国王を操りやすくなる。いやあ。腐った国ですねえ。汚職、横領何でも来い奸臣バンザイ！の国ですよ。よくこの国潰れませんか。後宮には愛妾たちが38人います。あと奴隷は数え切れないほどいますね。現在、王妃の座は空席なので熾烈な争いが繰り広げられています。はは。なかなか過酷な環境ですよ。

「あ〜あ〜（最近暇ですね〜）」

「あら、起きられましたか姫さま。お散歩でも行きましょつか？」

「あゝ（いいですねえ。」

「では失礼しますね。」

この話しかけてきて来た人物。私の乳母でサリーといいます。28歳の見目麗しい人物です。宰相推薦の乳母です。そうです。あの宰相ですよ。いやあ、私って母君に対する人質なんでしょうか？このサリー、私と同じ部屋で生活しています。小用で離れる以外ずっとです。ははは。やっぱり人質ですね。母君が国王に余計な事を吹き込まないようにですよ。サリーがずっと部屋にいるので、なかなか術が使えないですよ。体が心配です。遠見の術で見るくらいです。まあ色々噂話は聞きましたが。詰まらないですねえ。最近母君にも少ししか会っていません。あつ、いま1歳半になりました。国王がずっと母君の所にいるんですよ。あの色ボケメタボが、国政はまるつきり人任せですよ。

だから最近ハサリーが読み聞かせる絵本とか散歩が楽しみです。後宮の庭は広いんですよ。噂話は盛んですし。でも視線が痛いんですよ。母君は現在王妃の最有力候補らしいです。特に宰相のご令嬢の視線が痛いんです。たまに話しかけてくるんですが、顔は笑ってても目が凍てついているんですよ。プライド高そうな人ですから抱っこされたことが有るんですが、あれは痛かったなあ。思いつきり爪を立てられました。このご令嬢、ブライア妃と仰るんですが母君の前のお気に入りだそうです。若く綺麗な女に寵妃の座を取られたので恨みまくっているんですよ。ブライア妃32歳。母君20歳です。国王には、私を入れて王子6人王女13人の子供がいます。私は13番目の王女になります。13。不吉ですね。まあ、厳密には私は国王の子供ではないんですがね。父君はいまだに謎です。どこにいるんでしょうか？いつか会えるといいですねえ

「お庭に着きましたよ。今日は誰にも会わないといいですねえ。」

「うあゝ（そうですね）」

「あまり長い時間外にはいられませんから1周してから帰りましょ  
うねえ」

サリーは私を抱きながらゆっくりと庭を歩く。途中の花壇の花や木、  
飛んでいる鳥を指さし私に説明しながら。悪い人ではないんですが  
ねえ 危害は加えてきませんしいい乳母ですかね。  
ああ、今日もいい天気です。

## 第8話

### 第8話

真っ白い何も無い空間にいる。上下左右白くて、自分の体がまっすぐに立っているのかどこを向いているのか判らない空間に漂っている。

「おや。誰かに呼ばれましたか。」

シルディアナは、慌てることなく落ち着いている。普通の人なら慌てたり夢だと思っただが、交友範囲が人間以外にも及ぶので不思議な現象には慣れていいるのだ。周りをゆっくりと見渡すと、緑色をした輝き光が見えた。

「あつちですね。」

光に向かってふわふわと浮きながら移動していく。光に近づき触れると周りの景色が一変した。

地面を緑に覆われた光溢れる世界で、暖かな風が足元の草を揺らしている。少し離れた所に土台を石で造られた平屋の一軒家が見えた。煙突からは白い煙が立ち上っている。周りには他の建物は見えない。柵に囲まれた畑と、自由に歩いている鶏だけである。

「田舎の一軒家風ですか。なかなか面白い趣味ですねえ。」

面白そうに笑みを浮かべながら家に向かって歩いてゆく。シルディ

アナは現在3歳に成っているのでこれぐらいの距離なら問題なく歩ける。ブロンドの長い腰までのフワフワの髪に、濃いアメジストの目。

肌は白くて頬つぺたはバラ色に輝いている。レースの付いたかわいらしい赤いドレスを着ている。微笑みを浮かべた顔は天使のようで、思わずお持ち帰りしたくなる。甘やかし、可愛がり、ネコ可愛がりしたくなる様は、実際後宮の女達から可愛がられている。ブライア妃も稀に微笑みかけるくらいの超美幼女だ。

「おじやまします。」

「どうぞ。お待ちしていましたラーバレスティヤ様。」

この田舎風一軒家には不釣り合いな美女が迎え入れる。美女は、濃緑の髪に淡い緑の目で白い肌のとて肉感的な素晴らしいプロポーションの体を、質素なクリーム色のワンピースで包んでいる。

「ルクレエスト。久しぶりですね。今はシルディアナと呼んでください。」

「かしこまりましたわ。シルディアナ様。」

シルディアナを部屋に通し椅子を勧めながらルクレエストは答えた。テーブルの上にはお茶の準備がしてある。お茶を注ぎシルディアナに勧め、お菓子も添える。

「この度は私の管理する世界に来て頂いてありがとうございます。まだ3年ほどですがいかがでしょうか？生まれる場所などは完全なランダムで選びましたが、不都合はありませんか？」

「ええ。後宮は入ったことはあつても、生まれた事は無かつたのでなかなか新鮮です。まあ王の寵を得る分には変わりありませんがね。まだ世界は全体を見ていませんから何とも言えませんが。」

「そうですか。軽く御説明いたしましょうか？」

「お願いします。いつも乳母が付いているので術が使いづらいですよ。」

「では。この世界は私の弟子ソーントンが作った世界です。卒業試験に作らせたのですが、なかなか良い出来だったので議会の承認を受けて存続しています。ですから直接の管理はターロンがしています。あなたが来ていることはダーロンには話していません。シルディアナ様はこの世界の管轄外から来た魂ですので世界の規制には当てはまらず好きにお過ごしください。人種は、人間種・獣種・幻想種・悪魔種・天種などがいます。ほとんどごちゃ混ぜですので大雑把な区切りとなります。人によって区切りを変えたりしますのです。ああ、あと魔獣などもいますわ。国によって大体種が分散していますね。国同士の交流があるので混ぜている国もありますわ。」

「なるほど。ターロンに話していないのはなぜですか？直接の管理者なのでしょうか？」

不思議そうな顔で、シルディアナは尋ねる。大方ちよつとした悪戯なんだろうが。などと思っていることはおくびにも出さない。

「いろいろな経験を積みませようと思ひまして。あと、いつ気が付くのかとちよつとした試験ですわ。ふふ。」

「そうですか…。ああ、この体は何種でできていますか？混じって



いるみたいなのですが、比較対象がいなくて。」

分析するようにルクレストがジツとシルディアナの体を見つめる。ぱつと見は人間の形をしているがシルディアナは近くにいた人達とは何かが違うと感じていたので聞いてみる事に見てみたのだ。

「あら、すべての人種が混じっていますわね。珍しい。母親が人間と悪魔種の中の淫魔族の血を引いていますね。父親は幻想種の龍族と天種の神族の血です。父親の家系はいろいろ混ざっているようですね。本当に珍しいですね。いまいらつしやるのはトラミアニア王国ですよ？あの国は人間種至上主義で排他的ですからお気を付けくださいね。」

さも心配そうな顔でルクレストが答えた。作為を感じる。人間種至上主義の国にごちゃませの混血児。しかも後宮にいるのに国王の子供ではない。胡散臭すぎる。ランダムで選んだって言うには確実に嘘ですね。まあいいでしょう。ごちゃませの体、楽しそうですね。成長が楽しみです。大きくなるまでに把握が必要です。サリーには悪いですが幻術を使わせてもらいましょう。あまり使いたくなくなつたんですが、これも楽しく生きるためです。ごちゃませか、とても興味深い。

「珍しい生まれなんです。気を付けますね。でもいろいろ楽しみですよ。」

「そうでしたわ。この空間にお呼びしている間はお体は見張っていましたがご安心くださいね。」

「ありがとうございます。いつ害されるか分かりませんがね。たまに毒入りのおやつが出てきますから。こっそり軽く解毒してい

るんですよ。魔法は使えない事になっていますから苦しんで耐性があるから死までは至らないと思ってくれる様にしているんです。本当に耐性ができてきたんですけどね。毒の効かない体になるのが楽しみです。毒入りは特に美味しいおやつに多いですから。」

「はは……。そうなのですか。では楽しんでくださいね。何か御用があればお呼びください。」

ルクレエストは顔を引きつらせながら微笑み言った。次の瞬間にはシルディアナは部屋の中から消えていた。

「あの方は相変わらずですわね。死が身近にある環境でも楽しんでいらしゃる。転生できるからかしら？いいえ。滅びる時でもあの方は楽しんでそうですね。何にでも楽しみを見出される。どのような人生を送られるか楽しみですわ。ふふふ。」

ルクレエストは一人、お茶を飲みながらつぶやいた。

## 第9話（前書き）

更新が遅くなり申し訳ございません。不定期更新でお願いいたします。

## 第9話

### 第9話

後宮にある一室。部屋の中は薄いピンクと白で統一されて可愛らしい部屋に仕上がっている。

天蓋付きのベットにはハニーブロンドの髪をした幼い少女がすやすやと気持ちよさそうに眠っていた。

朝の支度のためにサリーが部屋のカーテンを次々と開けていくと窓からの日差しがベットにまで届き、日の光を感じたのか少女が瞼を震わせてうつすらと目を開けた。

「う、うん。」

もう朝ですか。日の光で起きるのは気持ちがいいですねえ。今日も平和に過ごせるといいですが。

「起きられましたか？姫様。」

「おはようございます。サリー。」

「おはようございます。今日もいい天気ですよ。さあ、お着替えしましょうね。今日は陛下とメリアナ様が御一緒に朝食を召し上がるそうですわ。」

おや。ひさしぶりですね。何かあったのでしょうか。いつも2人で過ごしているのに呼んで下さるとは。珍しい。楽しみですな。シルディアナはベットから飛び降りた。その様子を少し眉をひそめ洗

面の用意をしながらサリーが見ている。小言を言われそうですね。話を逸らしますか。

「お父様とお母様がですか！大変です！早く着替えなくてわ。」

「そんなに慌てずとも大丈夫ですよ。ですが久しぶりにご一緒できてよかったですね。今日のドレスは陛下がお気に召していた薄紫のドレスをご用意いたしましたよ。これをお召しになったシルディア様は妖精のようですからね。陛下からも御褒めいただけますわ。」

サリーは小言を忘れたように微笑んで言った。あの服ですか。確かにかわいいですね。可愛い娘を印象付けないといけませんからね。

「そうですね。久しぶりにお会いするんですから可愛くしないと。髪に結ぶリボンも合わせてくださいね。お母様にも褒めて頂かないと。」

手際良く洗面を済ませて、ドレスを着る。このドレス1着で平民が一家族1年暮らせるだけのお金が掛けられている。この様なドレスをシルディアナは何着も持っている。リボンには手の込んだレースに宝石が編みこまれている。まったく贅沢ですね。金銭感覚がおかしくなりますよ。これが普段着なんだから。成長期でどうせすぐに着れなくなるのに。平民は重税で苦しんでいるようですよ。この国、本当に危ないようですよ。

「はい。準備できましたよ。とても可愛らしいですね。」

さて、久しぶりの親子の対面行きますか。母君元気かな？

\*\*\*\*\*

部屋の中には2人の男女が寄り添うように席についている。この国の国王とその寵妃メリアナだ。テーブルには豪華な食事が並んでいる。朝食にしては無駄に豪華だ。部屋の中に可愛いらしい少女が入ってきた。少女は嬉しそうな笑みを浮かべている。

「おはようございます。お父様。お母様。」

「おはよう。シルディアナ。今日も可愛いな。」

「おはよう。シルディアナ。本当に可憐で妖精のようだね。」

ふっふっふ。褒められましたね。そうでしょう、可愛いでしょう。自画自賛したいくらいですよ。まったく。いい遣伝子を頂きました母君。ちよつと痩せたように見えますね。メタボは相変わらずメタボですねえ。朝から栄養過多の食事を取っているんだからしょうが無いのかな。母君を見習って欲しいもんです。母君の女磨きはすごいですからね。

「ああ、本当にかわいいな。それに大きくなったな、もう6歳か。子供の成長は早いものだな。」

「ええ、本当に。」

「今日はシルディアナに報告が有るんだ。メリアナが懐妊した。だからしばらく安静にしなければならぬ。お前もメリアナが健やかに過ごせるように、手伝うんだぞ。」

2人で微笑みあつて何を言つかと思えば、懐妊ですか。また周りが騒がしくなりますね。

「本当ですか?!おめでとうございますお母様。とても楽しみです。」

「ありがとうございます。今度こそ無事に生んで見せますわ。我が君。」

メリアナは国王に決意を秘めた目で見つめながら言った。シルディアナを産んだ後2回孕んだのだが、2回とも流産している。毒を盛られた所為と突き飛ばされ階段から落ちた所為だ。勿論、原因の犯人は処刑されている。王宮に敵は多いのだ。寵愛を求める側室たちや、後見人の宰相の政敵など。他にも数え上げれば切りが無いほどいる。

「ああ。これからの警備は、今まで以上に厳重になる。シルディアナ。お前にも専属の護衛がつくことになるからな。」

「護衛ですか?」

国王の話に、シルディアナが吃驚したように答えた。また面倒ですね。ずっと側に人がいるのは嫌なんです。まあしょうがないか。

「メリアナが懐妊したことで、周りが五月蠅くなるからな。お前に何かあったらメリアナが悲しむから我慢してくれ。その代りに城内なら自由に行動を許そう。」

国王が心配そうにメリアナを見て言った。本当に溺愛しているようだ。メリアナは嬉しそうに微笑み返している。

「そうですか。わかりました。ありがとうございますお父様。」  
「なんだ。それならいいですよ。行動範囲が広まりますからね。やっぱり自分の目で見て回らないとね。楽しみだな」

「良かったわねシルディアナ。そうだね、今日は具合がいいから後で散歩につきあって頂戴ね。」

「はいお母様。よろこんで。」

シルディアナはにっこり笑って答えた。

\*\*\*\*\*

メリアナ妃に与えられた専用の庭。美しい花々で彩られた見事な庭の中ほどで、親子がお茶を楽しんでいる。周りには人払いがされているのか人影はない。しかし異変が起こればすぐに駆けつけれるように護衛が周りを囲んでいる。話の内容が聞き取れないように2人の周りには結界が張られていた。今朝懐妊の話をし、その詳しい話をするという事で誰も結界を張っている事には不審には思われなかった。この親子が話す時は宰相の監視が厳しくなるのだ。

「ねえ、シルディアナ。あなたも気が付いているのでしょうか？」

日常話の続きのようにメリアナは話し始めた。

「何をですかお母様？」

「私の体の事よ。多分、この子が無事に生まれる事は無いわ。いま



までの毒が体に溜まり過ぎているのよ。それにブライア妃のお子様  
がもうすぐ成人になられる、宰相も守って下さらないでしょう。も  
う私は用済みになるのよ。」

メリアナは穏やかな笑みを浮かべながら、大した事ない話のように  
言った。

「そんな事はありません。お父様が守って下さいます。」

シルディアナは悲しみを顔に浮かべないよう微笑んで答えた。会話  
は聞こえていないが表情は見られているのだ。喜ばしい話をしてい  
る時に悲しみの表情は不信感を与える。やっぱりそうですか。生命  
力が衰えて来ていましたからね。私には体の不調は治せますが、継  
続的な心労はどうしようも出来ませんからね。記憶の改ざんでもし  
たいんですがねえ。そうとうなストレスの中で過ごされていますか  
ら。

「今の陛下は完全なお飾りよ。殿下が成人為されば我が君も用済み  
廃されるでしょう。私はねシルディアナ。とても満足なの。」

「満足ですか？」

「ええ。無理やり戦を仕掛けられ連れてこられたけれど、復讐は果  
たしたものだ。国王を籠絡し、悪妃と呼ばれるほど贅沢をしてこの国  
を弱体化させたわ。この国は戦を仕掛けられて滅ぶでしょう。うふ  
ふ。楽しみだわ。ムフリシア族の多くはもうこの国にいないし、こ  
の国は差別がひどいですからねえ。この国を乗っ取るうかとも思っ  
ていたのだけれど、我が君の権力が無いから滅ぼす事にしたの。」

「それがお母様の望みなんですわ。滅ぼす事が。」

「あなたには苦勞を掛けるわね。ごめんなさい。でも許せなかったのよ。この腐った国が！……はあ。あとはあなたの事が心配なのです。実はね、あなたの父親は我が君では無いのよ。」

「……そうなのですか。まったく似ていないので余り驚きはありません。父親はどのような方ですか？」

なるほどねえ。やっと本心が聞けて嬉しいです。余り贅沢は好きそうでは無かったですからね。父親の事も気になりますよ。表面上2人はニコニコと笑いあいながら話している。このぐらいの芸当は王宮では必須なのだ。心情を読まれる様では直に獲物にされる。腹黒くなければ生き残れない。その腹黒さも気づかれてはいけないのだ。

「あなたはとても賢い子ねシルディアナ。我が君の……いいえ、あの男の子供を産みたくなかったの。だから後宮に忍び込んできた方の誘惑に乗ったのよ。他国の身分ある方だと思うわ、お衣装が良いものだったし。王宮に滞在して居ると言っていたから。ガルスタと名乗られたけれど多分偽名でしょう。私も詳しくは聞かなかつたしね。金髪に緑の目の素敵な方だったわ。あなたの髪色はあの方譲りね。」

懐かしむように、大事な思い出を語るようにメリアナは話した。後宮に忍び込むとは、なかなかやりますね。ガルスタ。偽名ですか。なるほど、滞在客の中にその名を持つ方が居なかつたんですね。ひと時の恋ですか。いい思い出なんでしょうね。

「髪色が……。でも会うことはなさそうですね。先の事は分りませんが他国の方ですし。」

「そうね。子が生まれた事も知らないでしょうし。……クス。あなたの方はずいぶん私に惚れ込んで下さったのよ。国に連れ帰りたいて。まあ、ただの睦言でしょうけれど。クスクス……。ねえシルディアナ。女は強くしたたかに生きるのよ。自分を守るのは自分しか居ないので。私が居なくなつた後も強く生きなさい。あなたは魔力があるので。ですから牙を研ぎ澄ませなさい。でも使い所を間違えないようにね。」

「はいお母様。でも……」

「なんですか？」

「お母様は死ぬ御積もりですか？」

「ええ。私の死は復讐に必要なのです。体も弱っていますし、もう疲れました……。私が死んだら我が君はますます腑抜るでしょう。そのくらい惚れ込ませましたからね。ふふ。その後、腑抜た陛下を私の後を追つて自害した事にして宰相が害する。殿下が正式に王位を継ぐまでは継承争いが起こるでしょう、正式に後継者と認められていませんからね。そこはずっと陛下が引き延ばされてきましたから。指名されていない以上、争いが起こるのは必須。多分そこでレイクヴィータ帝国からセパタ国が攻めて来るでしょう。この国は亜人を毛嫌いして嫌われていますからね。外に目を向けず、搾取ばかりの国は滅びるか、良くて属国として生き残るくらいです。あなたも外交手腕として使われるか、殺されるかもしれません。いざという時は逃げなさい。姫としての義務も大事ですが、あなたには生きていて欲しいのです。母の我儘です。」

「分かりました。私は精一杯生きましょう。お母様の我儘はきつと

「叶えます。」

ええ必ず。母君の願いを叶えましょう。母君の予想通りに行かなくても、私がこの国を滅ぼしましょう。本当は母君の命を救ってこの国を滅ぼす事も出来るのですが、死もまた母君の願いなんですね。子として母の願いを叶えましょう。長生きしますよ。

「ありがとうございます。碌に母として接する事もせず、小さいあなたを一人にする事を許してちょうだい。そして、私の復讐に巻き込んでごめんなさい。」

「お気に為さらないで下さい。私は大丈夫です。さあ、お菓子がおいしいですよお母様。」

「そうね。ふふふ。おいしい毒入りのお菓子ね。」

2人は穏やかな笑みを浮かべて柔らかな陽の中おしゃべりを楽しんだ。先ほどの物騒な話など無かったように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3621k/>

---

異人なる渡人

2010年10月28日08時01分発行